



ローリング・ストーンズそして源氏物語

河井謙治 (高輪学園 高輪中学校・高等学校)

2月26日、3月4日私は東京ドームにローリング・ストーンズのライブを見に行った。周りは若い人たちも多かったが、年輩の方々の多さにストーンズの魅力に取り付かれた人達の喜びを感じた。演奏が始まると1曲目から観客は総立ちで、ミック・ジャガーのボーカル、キース・リチャード、ロン・ウッドのギター、チャーリー・ワッツのドラムスに酔いしれた。新曲より往年の名曲、ヒット曲に体を預け、リズムに乗り、通路ではスーツの上着を脱ぎワイシャツを腕まくりして踊る中年男性。ある新聞の記事でストーンズはモーツァルトと並び評されていた。もはや、サティスファクションは古典の域に達し、発表時より、それぞれの時代の人達に享受され影響を与えてきた。まさにそのライブが東京で行われ、曲のリズムに観客の今までの生様が重なり、時に涙を流したりする。「私はストーンズの音楽に感激し陶酔を覚える。」と前の席の女性が話しているのを聞くと、納得する。

中学・高等学校で国語を教える場合、授業で使用する教科書は各々個性があり、それぞれに特徴を出し編纂されている。しかしその中でも、定番と言える作品も多い。夏目漱石、芥川龍之介、志賀直哉、川端康成の小説。そして古典の世界では、万葉集、古今集、伊勢物語、平家物語、方丈記、徒然草そして定番中の定番源氏物語など、挙げたらきりが無い。読者の中には、「内容は覚えていないけれども学校で習ったことがある。」また「書名しか知らないが何となく国語を教えてくださいました先生の顔とその雰囲気を出す。」あるいは「修学旅行で太宰府に行った時、菅原道真の「東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」の歌を説明され、道真公の時代に思いをはせた。」などと言った経験をお持ちの方が多いのではないだろうか。古典の持つ魅力とは何なのだろう。どうして私達は古典の世界に人の営みを感じ、心情が揺さぶられるのだろう。千年以上前から脈々と流れる、文学が伝えてきたその心というものは何なのだろう。

昨今古典に興味を持たない人達が多くなってきている。大学入試で私立理系を目指すと、入試科目に国語が入っていない。一般教養としての国文学の教養は必要なのだが、日々目先の事に追われ効率を考え、早急に結果を出すことを要求される。そしていつのまにか古典の世界は隅に追いやられてしまう。しかし私達は、たとえば桜の開

花宣言から始まる桜前線の動きに一喜一憂する。「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(古今集)と春はのどかな季節なのに、桜が咲くと心ときめかせ、散ると聞くと悲しく思い、心が安まる暇がない。作者は平安時代の色好みの第一人者、伊勢物語の主人公在原業平である。現代人も、三月桃の節句、五月菖蒲、七月七夕、そして秋は紅葉と、季節それぞれの景物に思いを誘われる。何か私達の体の中には、自然や季節に対して反応せざるを得ないDNAのようなものを持っているのではないだろうか。

最近、和食がユネスコ無形文化遺産に登録された。世界の国々で活躍する日本人が、海外で外国の方と話す時「和食」あるいは「うま味」が話題になると聞く。また日本の文化について尋ねられる事も多いと聞く。たとえば「うま味」「京都」「源氏物語」について外国の方に聞かれたらどのように答えるのだろうか。まさか「入試の科目になかったので知りません。」と答えるわけにもいかない。自国の文化や伝統、個性を知らずしてのグローバル化は、噴飯ものであろう。学習する場所はたくさんある。家庭あるいは学校。教室以外でも遠足、運動会、文化祭、修学旅行など自国の歴史、風習、国語など学習する機会が多いはずである。

ところで、授業前には教案を作らねばならない。教壇に立つ前に疑問点があると納得するまで調べるようにしている。助詞一つの使用法について何日も悩むことがある。勤務校の図書室で調べる事もあるが、最近多く利用するのが鶴見大学である。勤務先から泉岳寺京急に乗ると30分程で大学に着く。大学図書館は多くは閉鎖的で自由に書物を手に取り見る事が出来ない。しかし鶴見大学図書館は開放的で、手続きし許可されれば、外部の人でも利用できる。特に開架式書架は、国文学の調査に最適であり、全国にこれ以上の施設はほとんどないだろう。しばし書物をめくり問題点を解決していく。明るい照明、使い心地の良い机と椅子の配された空間。そして前方には演習なのかレポート作成なのだろうか、真剣に書物に見入る学生さんたち。いつしか自分が大学生に戻り一緒に勉強している気持ちになる。ロビーには古典籍の展示スペースがあり、鶴見大学の古典籍収集は文学部創設時より意欲的で、平安時代の古筆切から鎌倉時代の写本、江戸時代の版本等を収蔵し、年間を通して計画的に展示が企画されている。また図書館HPでは、それら貴重本もダウンロードすることが出来る。閉鎖的に貴重書・資料を死蔵させている大学が多いなかで、鶴見大学図書館が情報開示に積極的で利用しやすい環境を作っていることに感心する。自分の卒業した大学の比ではない。

3月14日、「源氏物語扇面貼交屏風」を見に鶴見大学図書館に赴いた。折しも卒業式で華やかな雰囲気の中、「源氏物語扇面貼交屏風」は卒業生の記念撮影の背景となってその雅な世界を演出していた。江戸時代中期、陰陽道を専らとする安倍泰章の妹春子が霊元天皇にお仕えし男宮を生む。その男宮は正徳3年わずか5歳で亡くなる。天皇は出自の低い春子に毎年源氏絵の扇を賜り心の支えとした。天皇が崩御されると春子は出家し尼となり、霊元天皇より頂いた思い出の源氏絵の扇を甥布丹に譲り、布丹はさらに娘へ贈ろうとして屏風に仕立てた。この「源氏物語扇面貼交屏風」はそのような逸話を持ち、江戸時代の文華が伝わる秀逸な作である。300年の歳月を経てこの屏風は私達に何を語ろうとしているのか。岡山美術館に「世々の友」という古筆手鑑がある。貼り込まれた多くの古筆切は、時を隔て今に生きる私達の「友」となり、語りかけてくる。優れた古典籍を収蔵する鶴見大学は、今度は何を私達に展示して下

さるのか楽しみである。多くの古典籍は、多くの感激・文学の可能性を具体的に示してくれる。

図書館展示の帰り、総持寺参道を歩くと梅の花が咲き始め、良き香を漂わせ卒業生を祝福しているようだ。そして4月、今度は桜が新入生を迎えてくれることであろう。
(かわい けんじ)

アゴラ解題（源氏物語 濔標）

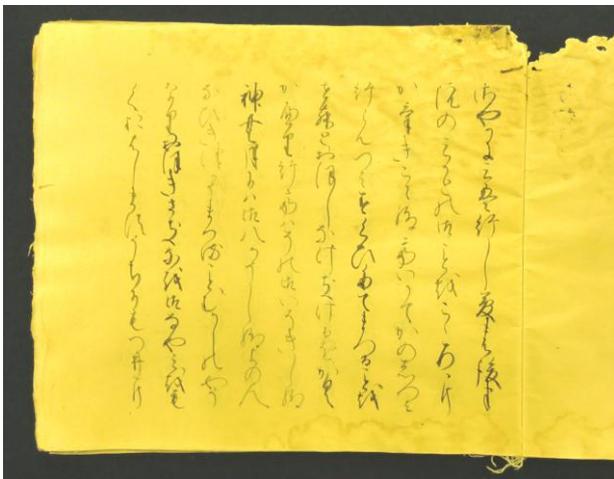
伝交野時久筆 未装丁仮綴じ本源氏物語 濔標 1冊

高田信敬(文学部日本文学科)

54帖の大作『源氏物語』を一揃い調べるとすれば、どのような材料や手順が必要となるのだろう。その具体的過程を熟知される方は、研究者と雖も存外少ないのではないか。主題・文学理論・解釈など高級な議論に熱が入り、制作の実態に即した研究へはあまり関心が向かわない学界の風潮に一因があろうし、また、美しい表紙や題簽を具備し豪華な箱に収められた、いわば最終的な形態で目に触れるのがほとんどだから、書物の始発もしくは途中経過がどうであるかに、なかなか思いを致せないことにもよる。

ここに紹介する未完成の零本は、完成からはほど遠い些細な資料ながら、しかしそれだからこそ意味が大きいものである。詳しい事情は不明であるにせよ、本文書写を中止してしまったその書物のかたちが偶然現在に残された場合、装丁の豪華を誇る典籍よりもさらに多くのことを、また完全な本には期待し得ないことを、問わず語りに語ってくれる。交野時久（1647－1670）筆と伝える『源氏物語』濔標零本1冊が、それである。まず書物のありようを示しておく。

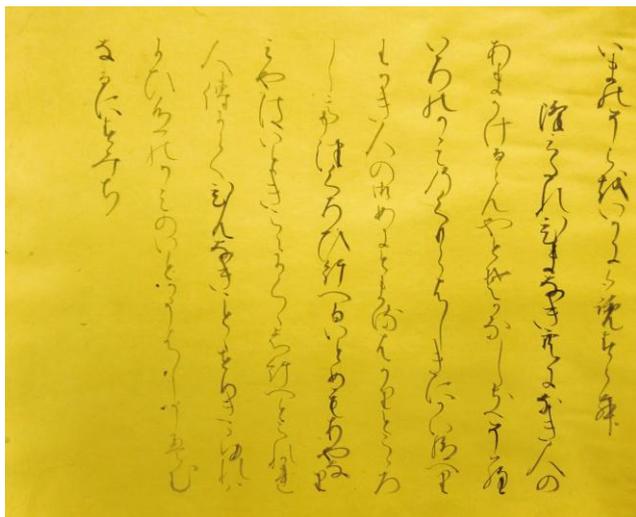
列帖装のために用意された3括り（縦16・8、横約19糎）。格別の表紙はない。厚手良質の斐紙を用い、升型本（縦横16糎程度）を目指したかと推される。化粧裁ち以前に制作を中断したため左右寸法が幅広、かつ漉き耳の残った状態である。



各括りはその下端を白絹糸で止めるのみ、綴じ穴（通常4個）もない。したがって綴穴は製本直前にあけられる、と判断できよう。第1括り16丁（うち首2丁白紙）・第2括り18丁・第3括り18丁（うち後半11丁白紙）、各括り第1丁左上に「身尽一（～三）」と細字書き入れを見る。書物として仕上がれば裁ち落とされる部分に記され、装丁の最終段階に至る過程で消えてしまう情報の1つである。第3括り最終

丁オモテに楮紙片（縦10・2、横2・2糎）を押し「交野時久朝臣正筆」と墨書。比較すべき筆跡を知らないので正筆書の当否は確認し得ないが、書風・紙質等から近

世前半の写本と見られ、時久の書写と臆測しても特段の不自然はない。品格ある温和な能筆は、いかにも公家の手に相応しい。虫損・湿損若干。



丁のオモテより書き始め毎半葉10行、漢字平仮名交じり12～16字程度、和歌1首2字下げ2行書とし、その末尾は直接地の文へ続く。本文系統は青表紙本系三条西家本に近く、ままた「神無月には」(諸本神無月に)・「ゆいご」(諸本ゆいごん)「人づてにて」(諸本人づてには)の如き独自異文を持つ。墨付き39丁。本文は「えむ／なるにすみち」(大成509頁4行目まで)で突然終わっており、以下約2700字ほどを欠く。つまり墨付き最後の丁は10行目を6字まで書き、

「すみつき」とあるべきところを「すみち」と誤ったまま、以下余白とするのである。不足分は約2400字程度と推され、もしこのまま書き続けば、17丁ほどの料紙が必要となる。第3括りは余すところ11丁で勿論不足、新たな括りを用意すれば10丁以上の無駄な白紙が生じてしまう。ひょっとすると、書きさしの理由、少なくともその1つは、このあたりに求められるのではないか。

僅か3括りの零本ながら、400年の時間が止まったように、書物製作のある段階をまざまざと示してくれるのは、誠に興味深い。それも、未完成写本のほんの一部に過ぎない資料を、見捨てることなく手から手へと大切に伝えてくれた愛書家がいたからこそ、今日典籍の声を聞き取りうるのである。旧蔵者達に感謝しなければならない。

図書館からのお知らせ

平成26年度第2回選書ツアー

11月に今年度第2回目の選書ツアーを行います。

日時： 11月1日(土) 14:00～

会場： 丸善(丸の内本店)

参加募集は図書館ホームページ、ブログ、ポスター等でお知らせします。

アゴラ－鶴見大学図書館報－ 第142号 2014年8月25日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>